

第1回「渡良瀬遊水地の自然保全と自然を生かした利用に関する懇談会」

(1992年5月12日)の主内容メモ

文責：高松健比古

会場：古河市・古河グランドホテル

時間：13:00～17:55 (現地見学含む)

委員出席者：桜井善雄〔座長〕、石川幹子、大渡 斉、須賀堯三、高松健比古、
宮村 忠 (中途退席)、矢島 稔、金澤 豊 (野木町長・・中途退席)、
高際高德 (藤岡町長)、針ヶ谷照夫 (板倉町長)、片野嘉作 (北川辺町長)

代理出席者：森助役 (古河市長代理)、荒井助役 (小山市長代理)

欠席：永野 巖

配布資料：・資料1 第1回懇談会資料

・資料2 写真集

・パンフレット 「渡良瀬遊水池総合開発事業」

「たのしさいっぱい」

「渡良瀬遊水池の生きものたち」

「まちと水辺に豊かな自然を (多自然型川づくり)」

望月 (建設省利根川上流工事事務所) 所長挨拶

遊水池の歴史は、足尾鉍毒事件による谷中村の廃村によって誕生したものであり、この事実を忘れてはならない。だが、遊水池ができ、その場所が未利用地になったことにより、自然にかえった。現在は、他にはみられないような貴重な自然がある。一方、ぜひここを利用したいという地元からの声もある。ただ、どんな利用でも良いわけではない。破壊ではなく「自然を生かした利用」を心がけねばならない。自然保全と利用の調和を考えるべきである。

建設省では、今後の河川施設・利用施設の整備にあたっては、自然に配慮した整備をしたい。「多自然型川づくり」ということがごく最近になって叫ばれるようになった。治水のためとはいえ、従来ともすればガムシャラに整備を進めてきたが、これではダメだ。生物と人間の共存できる川づくりを心がける。これまでに整備が行われたものも、改造できるものは改造して行くつもりである。

そうしたことのために、皆さんから御意見をいただきたい。

なお、スケジュールとしては、今年度、つまり来年3月までに4回程度会合を持つことを考えている。また、この渡良瀬遊水池に関しては、国民の多大な関心もあるので、中間にシンポジウムを行うことを計画している。その節は委員の皆さんにパネラーになっていただきたい。

委員紹介

桜井座長挨拶

渡良瀬遊水池は、全国的にみても他の著名な地域と劣らず、きわめて重要な場所と認識している。そのあり方を考えるために、地元の人を含めてこうした懇談会を設置したことは、従来の建設省のやり方ではなく、建設省・工事事務所にとって一步前進した考え方であると評価したい。多自然型工法などを考えることも同様である。

私は長野県の環境影響評価委員をやっているが、事業に関して中央のコンサルタント会社がアセスメントをやると問題が多い。地元の人たちが調べたことの方が確かである。

結論を出すのはこの懇談会の主旨ではない、とのことだが、大きな成果を期待したい。委員の皆さんには、ぜひ積極的に御発言いただきたい。質問や意見等も“口調はソフトに、内容は厳しく”行きましょう。

資料説明 [13:20~14:20]

渡良瀬遊水池の概要・諸計画・現況について

(説明：利根川上流工事事務所・野村利水調査課長)

現地見学 [14:20~16:50]

ルート：三国橋→下宮橋→渡良瀬貯水池中の島→植生護岸→谷中村史跡保全ゾーン
→第2調節池西側堤防→石川橋→第3調節池→(県道・赤麻)→藤岡大橋
→運動公園→ゴルフ場(渡良瀬カントリークラブ)→谷中橋→渡良瀬貯水池
東側→谷田川・機場→第1排水門→三国橋→古河グランドホテル
(途中で金澤野木町長、宮村委員帰る)

現地見学後の質問・意見・感想等 [17:00~17:50]

高松

- ・懇談会のあり方について。谷中村の歴史や水質の専門的な立場の人が入っていないのはおかしい。委員には今からでも歴史や水問題・水質の専門家を加えるべきである。
- ・第2貯水池の件は、建設省の説明では全く触れられていなかった。現在のところ、いったいどういう方針なのか。ゆくゆくは建設するのか、それとも建設の見直しも含めて検討するのか。
- ・昨日、マスコミに同行して谷中湖に入れてもらった。そのとき、魚が数十匹死んでコンクリートの岸に打ち上げられていた。先ほど現地を見た時には、そちらで片づけられたのか死体は全く見えなかったが、こうした魚の死は夏場のアオコ発生時ではなく今でもあるのか。その原因はなんだと考えるか。
- ・動植物の調査を継続して行っているというが、先ほどの説明では鳥類のラインセンサスのコースがはっきりしなかった。ヨシ原など、従来の遊水池の代表的自然環境だけで

なく、ゴルフ場のように自然が破壊された部分でも調査を行っているのか。比較のためにも行うべきだと思うが。

望月

・歴史関係は、本日はお帰りになったが、宮村委員が詳しいと考えている。

水質の問題は確かにきわめて重要で、頭の痛い問題でもある。現在われわれの方でもいろいろと研究しているが、まだこうした懇談会で議論する前の段階だ。また、将来は技術的に解決できるとも考えている。

・第2貯水池の問題だが、資料では1行だけ触れている。

とにかく谷中湖は、水質に若干問題がある。また、護岸はコンクリートであって、これも問題である。これは認めざるを得ない。こういう経験を今後の河川施設の整備にあたっての反省材料とするつもりだ。

もし第2の貯水池をやる場合には、そういう問題の検討を終えてから進めて行きたい。
環境調査中でもあり、水質や多自然型工法の研究もしている、というところだ。

伊藤副所長

・谷中湖の魚が死んでいる事実は確かにある。しかし原因がはっきりしない。

護岸をブロックで覆ったためなのか、病気なのか、餌がないのか、あるいは寿命なのか、また、自然の池でも死ぬのか。ブロックを張ってない所でも死んでいるようだし、コンクリートの所だと死体が目立つことも考えられる。また、釣りをすると魚の体が傷んで死にやすくなる、ということもあるかもしれない。とにかくいろいろな方向で調査中だ。現在2つの機関で調べている。また、多自然型の護岸なら死なないかも検討中だ。

大渡委員（関連して）

・例えばフナは、今年は2月頃に産卵したようだ。産卵後の死亡ということも考えられる。フナの平均寿命は10年ぐらいた。寿命が尽きて死んだということもあるかもしれない。

ただ自然界では、そうした死体は見あたらないのが普通だ。普通の河川だったら、例えばカワウとかその他の鳥が、弱っている魚を食べるものだ。カワウが春先まで来ていたというが、そうした魚を食べるものがいなくなると死体が目立つだろう。鳥との関係は重要なことである。

・また、魚がよく死ぬ原因として考えられることで、あくまでも今日貯水池を見ての個人的な感想だが、あの貯水池は水の中の生物が少ないように思える。生物間のバランスがとれていないのではないか。

釣りをすると魚が傷むのは確かだが、それによって死んだ魚も普通なら見えないものだ。また、護岸だから特によく目立つ、というわけでもない。死体が見えるのは、死にそうになっている魚を食べるものがないからだ。

桜井座長

・溶存酸素はどうなのか。不足しているということはないのか。

伊藤副所長

- ・計測しているが、特に今のところ不足しているというデータはない。

野村・利水調査課長

- ・鳥類のラインセンサスに関して。ゴルフ場の周辺部で調査コースに入っている所はあるが、ゴルフ場の中は、やっていない。

石川委員

- ・今日、渡良瀬遊水池を見て回って、改めてこの遊水池の風景に感動した。

単に地元や関東地方というだけでなく、「日本の国レベルで大事なヨシ原」、という実感を持った。

・それに比べて、谷中湖は対照的だった。確かに一時代前の思想で作られたものなのだ、という印象だ。この貯水池をどうするのか、少しでもより良い景観に育てていくことができるのか。長期的に考えることが大事だと思う。そして、その際には、渡良瀬遊水池に残されたもともとの自然から学ぶ必要がある。

・その本来の自然景観の中で、広大なヨシ原のほかに、水路沿いに茂るヤナギのブッシュがとても印象的だった。ヨシ原には定期的な火入れがあり、水辺でそれを逃れたのがヤナギ。そうした経緯がよくわかる。

こうした部分を持つ渡良瀬川は、大変すばらしい川であり、すばらしい川の景観が残っていると思う。その実例からも、水のエッジの景観にはヤナギなどのブッシュを考える必要があることが明らかになっていると思う。

- ・谷中湖の護岸を考える際には、昔からの技術を取り入れれば、最も良くなるはずだ。

遊水池全体のヨシ原から学んで、知恵を働かせるべきだ。

- ・もう一つ、遊水池を回って問題だと感じたのは、あの谷中村の跡地だ。

あそこは「史跡保全ゾーン」として、遊水池の中で、人間が自由に入って接する場所（ポイント）になっているのに、「あずまや」にしても駐車場にしても、またその他の施設にしても、新たに整備されたものは、本来の風景となじまない、異質な感じを受ける。デザインの的にも問題が多い。

こうした施設を作る際には、そこにある自然景観との関連から工夫が必要なのであり、そうした基準から逸脱しないように一定のガイドラインを引いておく必要もあるだろう。

・ヨーロッパ等の貯水池を見る機会が多いが、緑があふれていて実に美しい。建物も景観的にその自然にマッチするように工夫されている。建設省の方々は、説明の中で水門などの建造物を自慢げに話しておられたが、はっきり申し上げてこれらも風景にそぐわないものだ。こうしたものもデザイン的に工夫すべきだと思う。

矢島委員

- ・はっきり言って、あの貯水池のようなものを、いくら作っても昆虫は住めない。

昆虫やカエル、その他の小動物にとって、彼らのハビタットは水深30センチまでなのだ。それ以上はいくら深くなっても関係ない。今日見たところでは、貯水池の護岸がどこまでも斜めに一直線に落ちていて、全く平板だ。あれでは小動物の住める範囲の部

分は、夏はものすごく暑く、冬はものすごく寒く、気温が激変してしまう。そもそもどこだって凸凹のない池はない。そういう凸凹が気温変化を和らげる小動物の住める場所だ。それから、周りを何とかしてほしい。コンクリートで固められた死んだ世界だ。植物が植えられ、釣り人がいた所は良いのだが。

- ・貯水池以外の場所（フィールド）は、オオヨシキリがたくさんいた。おそらく主な餌はバッタやコオロギなど、草食性の昆虫だろう。こういうのがメチャクチャたくさんいるのだろう。ただ、植生はどうも全体的に限られている印象を受けた。

- ・歩きながら少し考えたのだが、あの貯水池を作るとき土を6メートル掘ったという。その土はどこへ行ってしまったのだろう。もしも私だったら、その膨大な土の一部でフィールドに適当に「島」を作ったろう。

小山があると、盛り土の上下で湿度が変わることになる。昆虫なんて狭い世界に住んでいるのだが、そうすると特に越冬昆虫などがたくさん住み着くようになる。また、土の湿度が変わるから植物の多様化が計られる。それは昆虫の多様化にもつながり、より面白い世界ができると思う。

利根川上流工事事務所（所長または副所長）

- ・お話のあった、貯水池を作る際に掘った土の行方だが、大部分は東北自動車道を作るときに使われた。また、周辺地域の工業団地の埋立にも使われている。

- ・先生のお話の「島を作る」という案だが、基本的には遊水池の全体容量が変わらなければいろいろやっても差し支えない。

旧谷中村の「水塚」もそうした「島」の一例かと思う。

桜井座長

- ・建設省の調査に関する報告では、昆虫の種類数が少なすぎると思う。調査はいつ、どのくらいの頻度でやっているのか。

野村課長

- ・調査は平成元年から3年10月まで、遊水池全体で行った。方法はバイトトラップを12地点、ライトトラップを4地点とった。他に一般採集も行っている。

須賀委員

- ・河川工学の立場から言うと、川の環境を考える際に、治水・利水の問題と切り離すことはできない。

- ・最近では地球規模で異常気象が続いている。いつどんな状況になるかわからない。本来計画されている以上の洪水（超過洪水）の恐れもある。

貯水池の水質云々も言われているが、貯水池は10年に一度の濁水に備えての計画だった。しかし最近の状況では、濁水は2、3年に一度になっている。

関東地方では地盤沈下も進行している。新規の水が要るが地下水には頼れない。

以上のような状況があることも踏まえなければならない。

- ・次に、この懇談会は、今日が最初なので、いくつかその運営の仕方について意見を述

べておきたい。

渡良瀬遊水池の環境をどう考えるか、という点だが、個々の細かい問題をいちいち取り上げ、それに振り回されていたのでは時間がいくらあっても足りない。

議論に際しては、まず、環境項目を整理して提示すべきである。

遊水池をどう考えるのか、それも整理してほしい。その際、「自然」とはいったい何を指すのか、明確にしておくべきだと思う。それには「時間の変化」という点においても考えるべきで、基準を現在におくのか、それとも少し前におくのかでも違ってくる。

今日これまで述べられた意見を聞いていても、自然の保護・改良・創生と、三通りの意見が出されている。明確に分類してほしい。

また、自然界の要素、例えば鳥についてなら、その種類・量・季節などの事項がある。それらについて、例えば生息地の面積を減らしたらどうなるか、といったように、議論する材料を整理して提示してほしい。

そして最終的にまとめる際には、判断基準をきちんとしてほしい。

高際委員（藤岡町長・首長さんからの意見も、と言われて）

・今日は遊水池全体を見ていただいたが、とにかくよろしくお願ひしたい。

谷中村の件については関係者と十分話し合っただけで現在のようなものを作ったのだが、理想的な保存策を、今後第二、三、四回と検討してほしい。

・これまでに整備した所は、利用客が大変多い。本日来ていた人も、地元ではなく県外からの人が多かったようだ。花火大会など大変な人出がある。そういうのを目にすると、第一貯水池の開発はムダじゃなかった、やって良かったと思う。

これからも自然を守って立派な開発をしたい。

片野委員（北川辺町長）

・遊水池の開発は、もっぱら利水・治水で行われてきた。それが自然を破壊した、という話になるのだろう。もともとこの遊水池が作られる時には、私の町も計画に入っていた。それが、田中正造先生のおかげで残れたのだ。

昭和22年の水害を知らない町民が半分以上になっているが、水害は今後もないとは言いきれない。自然の保全を考えながら、第2貯水池の計画を進めていただきたい。

桜井座長

すでに予定されていた時間を大きく超過しているので、次回の集まりについて話をしたい。

次回には、一人5分程度を目標に、委員全員が意見を述べてもらいたい。そこで言いたいことを言うてもらう。時間内で図・表・スライド等を使っても良い。時間がなくて自分の意見が十分伝わらないと思われたなら、レジメを作って配布してもけっこうである。

次回は7月23日（木）に行う予定である。

（懇談会終了）

終了後の話から

高松：第2貯水池問題で、望月所長の話はもう一つすっきりしない。「作るとしたら」なのか、「作るときは」、なのか。

伊藤副所長：現在のところ、第2の件については何も決まっていない。第1貯水池の問題で頭がいっぱいで、第2どころではない、というのが事務所の正直なところだ。

高松：それでは、当分棚上げしている形なのか。

伊藤：そうとってもらって良い。

高松：野木の町長は途中で帰ってしまった。ゴルフ場の件で質問するはずだったのに。野木のゴルフ場については、何か聞いているのか。

伊藤：いくらかは聞いている。

高松：ゴルフ場造成はやめた、というのは本当の話か。

伊藤：そのようだ。ただ、議員の間にはまだ推進している人もいる、という話を聞く。町長さんもなかなか苦労しているようだ。

高松：時間がなくて言えなかったが、渡良瀬遊水池の鳥獣保護区の件は、どうなっているのか。せっかく栃木県が積極的に指定に動いているのに、建設省が同意しないのでできないでいる。建設省でも遊水池は野鳥の宝庫であることを認めているのに、銃猟禁止区域で済ましているのは納得できない。

伊藤：この件は実現に向けて検討している。反対しているわけではない。

高松：できれば栃木県の指定ではなく、四県にまたがっているのだから、国設の鳥獣保護区が望ましい。そうなるように尽力してほしい。

高松：埼玉県知事が空港建設を打ち出した。大変なことで、多くの人たちが振り回されている。

埼玉県河川課職員：あの件については、われわれも何も聞いていなかった。どこまで真剣な提案だったのかな、と思う。具体的な話はないのではと思うが。

高松：だが、群馬と茨城の知事は賛成している。やはり相当話が進んでいるのではないかと、思われても不思議ではない。勿論地元は絶対反対なのだが、最近は議員や有力者が空港誘致を言い出しているとも聞く。

埼玉：われわれの側では、知事がああいった発言をしても、別に何もやっていない。ほとんど進んでいないとしか思えないが。

高松：調査費がついたとも聞くし、一方では飛行コースとか自衛隊・米軍との関係で渡良瀬遊水池では飛行場は無理だ、という話も聞く。どれが本当なのだろう。

埼玉：われわれにもわからないが、とにかく、具体的な空港計画は進んでいないと思う。

*なお、6月13日の「集い」への出席要請については、会議の席上ではできなかったもので、個人的に挨拶等を兼ねて行った。その際、住民協議会からの資料送付及び案内について、送ってもらってありがとう等、お礼を言われた。(桜井・石川・大渡・矢島各委員、針ヶ谷板倉町長等) 板倉町長は、送ってもらった資料を早朝からお昼までかかってじっくり全部読んだ、とのことであった。「集い」に参加するかどうかにについては要請ただけで、はっきりした答を聞いていない。